

Title	マルト・ ビベスコと日本
Sub Title	Marthe Bibesco et le Japon
Author	佐野, 満里子(Sano, Mariko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2004
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 No.39 (2004.) ,p.57- 78
JaLC DOI	
Abstract	マルト・ ビベスコは1886年にブカレストで生まれたルーマニア人である。彼女の円熟期の小説に僅かながら日本の事物への言及がある。マルト・ ビベスコは生涯に30冊近い著書をフランス語で書き、フランスで出版した。彼女の作品中、1945年パリ亡命の以前にルーマニア語に翻訳・出版されたのは一部だけである。両大戦間のルーマニア知識層はフランス語版で読むことが出来たのだ。この国はヨーロッパ東部でただ一つのラテン系の国で、言語がフランス語と近いことがあり、19世紀前半から上流階級では子弟を教育のためにフランス送り出していた。国内の教育制度がまだ整っていなかったのである。ルーマニアは初めワラキア・モルドヴァ両公国として起こり、15世紀にオスマン・トルコ帝国に征服されて300年間植民地にされた。十八世紀に入りトルコは弱体化したが、台頭してきたロシアの他にオーストリア等西欧先進国への従属を強めることとなる。1848年フランスの2月革命に刺激されて、パリで学んだルーマニアの若者達が祖国の統一と独立を目指し革命を起こすがロシアとトルコが協調して武力介入し制圧されてしまう。しかし1859年に両公国で同一人物クーザ公を共通の君主に選出して統一国家ルーマニアが誕生する。その後1881年にドイツのホーエンツォルン家のカロール世を迎えてルーマニア王国となった。ロシア、トルコ、オーストリア・ハプスブルグ等の列強に囲まれ、ナポレオン三世の関心を引く中、国内貴族たちがまとまらず、ルーマニア語を解しない若い王を迎えるという解決策を取り独立国家であろうとした。
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20040930-0057

てご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

マルト・ビベスコ¹⁾と日本

—à la mémoire de Monsieur George Muntean²⁾

佐野満里子

マルト・ビベスコは 1886 年にブカレストで生まれたルーマニア人である。彼女の円熟期の小説に僅かながら日本の事物への言及がある。マルト・ビベスコは生涯に 30 冊近い著書をフランス語で書き、フランスで出版した。彼女の作品中、1945 年パリ亡命の以前にルーマニア語に翻訳・出版されたのは一部だけである。両大戦間のルーマニア知識層はフランス語版で読むことが出来たのだ。この国はヨーロッパ東部でただ 1 つのラテン系の国で、言語がフランス語と近いことがあり、19 世紀前半から上流階級では子弟を教育のためにフランス送り出していた。国内の教育制度がまだ整っていなかったのである。

ルーマニアは初めワラキア・モルドヴァの両公国として起こり、15 世紀にオスマン・トルコ帝国に征服されて 300 年間植民地にされた。18 世紀に入りトルコは弱体化したが、台頭してきたロシアの他にオーストリア等西欧先進国への従属を強めることとなる。1848 年、フランスの 2 月革命に刺激され、パリで学んだルーマニアの若者達が祖国の統一と独立を目指し革命を起こすが、ロシアとトルコが協調して武力介入し制圧されてしまう。しかし 1859 年に両公国で同一人物ケーザ公を共通の君主に選出して統一国家ルーマニアが誕生する。その後 1881 年にドイツのホーエンツォレルン家のカロール一世を君主に迎えてルーマニア王国となった。ロシア、トルコ、オーストリア・ハプスブルグ等の列強に囲まれ、ナポレオン三世の関心を引く中で、国内貴族達がまとまらず、有力な外国からルーマニア語を解しない若い王を

迎えるという解決策を取り独立国家であらうとしたのだ。

【マルト＝パリ】

マルトの評伝の作者ジスラン・ド・ディースバッハは彼女の代表作『カトリーヌ＝パリ』にちなみ、1章に「マルト＝パリ」の題をつけている³⁾。小説『カトリーヌ＝パリ』のヒロインは、ルーマニア人である両親が青春期までを過ごし、愛した町の名を与えられた。

マルトの父ジャン・ラホヴァリーはルーマニアの新興ブルジョワ家庭に生れた。11歳でパリに送り出されてルイ・ル・グラン校を優等で卒業し、祖国に帰った。後に彼はマルトが5歳の時にパリの公使となり、一家はこの町で3年をすごす。母はルーマニアの有力な貴族マヴロコルダート家の娘で、パリで育った。彼女はルーマニア語が出来なかったとも言われており、結婚後に住んだブカレストの生活に馴染めなかった。夫がパリ勤務から本国での仕事になった後も、夏は子供達を連れてフランスで過ごすことが多かった。早く亡くした一人息子が終生彼女の心を占めていたので、娘たちは寂しかったことをマルトは繰り返し書いている。末娘の自死の2年後の1920年に、長らく鬱気味であった母も命を絶ててしまった。

1848年の革命でワラキア大公ジョルジュ＝デメートル・ビベスコは退位に追い込まれ、パリに移住した。以後ビベスコ家はここを本拠とし、子弟はパリで教育を受けている⁴⁾。大公の三男ジョルジュはフランスでサン・シール陸軍学校を終えて軍人となり、仏軍に加わりメキシコ遠征や普仏戦争に参戦している。彼は古いフランス貴族カラマン・シメイ家に生まれたヴァランチヌと結婚する。1902年、二人の息子ジョルジュ＝ヴァランタンのもとにマルトが嫁ぐ。その寸前に、舅にあたるジョルジュ・ビベスコは急死した。そのためマルトは16歳で結婚すると同時にマルトは大公妃になったのである。

姑ヴァランチヌは若いころを第2帝政下のパリですごした。最初の夫の粗暴さを嫌って出奔し、ジョルジュ・ビベスコと一緒にしようとした。し

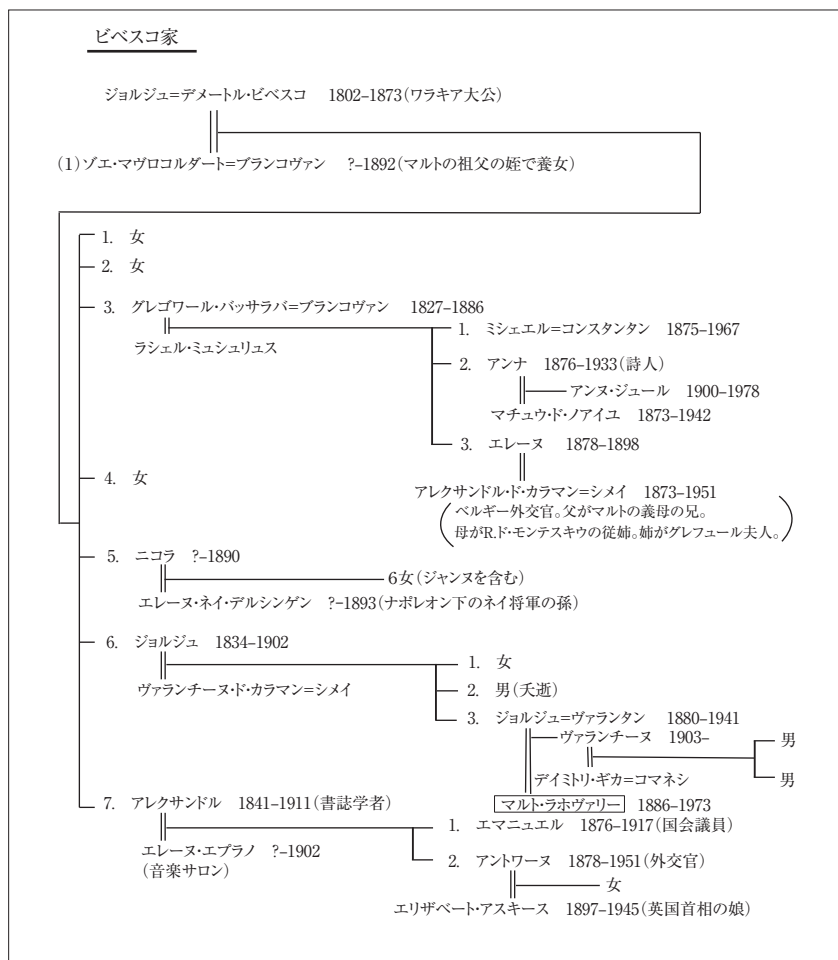
かし1860年代のフランスでは離婚が認められず、彼女は外国籍を取りベビスコ家の宗教である正教で結婚した。子供の養育や財産問題で前夫との争いが長引き10年近くも掛かった。その間彼女は人々の話題になるだけではなく、フランス貴族社会で重婚者と見なされたために長い間パリに行くことが出来なかった。

ヴァランチヌはブカレストの社交界など歯牙にも掛けていなかったらしい。ブカレストからさほど遠くないカルパチア山脈の入口にあるお菓子の城めいた外観の屋敷で暮し、年若い嫁のマルトにパリ時代のことを語り聞かせて過ごした。実の母に受け止めてもらえなかったマルトは義母に親しみを持つことになる。

マルトの生家、婚家ともフランス育ちのカップルの家庭であった。そして2人の母はそれぞれにパリへの思いをマルトに植えつけていったのである。

パリに定住したベビスコ家はすでに第2帝政期から社交界だけでなく芸術の分野でも良く知られた存在になっていた。一族には時代を先取りする美意識の持ち主が多く、初期のマネの作品を購入し、ルノワールを励まし、彫刻家カルポー⁵⁾を親しく迎え入れている。ベビスコ家の長男の娘である詩人アンナ・ド・ノアイユの文名が高くなり、彼女の生家の名も上げることになる。ベビスコ家の四男アレクサンドルは愛書家として知られ、夫人は音楽サロンを開き、ワグナー、パデレフスキー等を招き、若いドビッシーを庇護した。この2人がエマニュエル、アントワヌ兄弟の両親である。

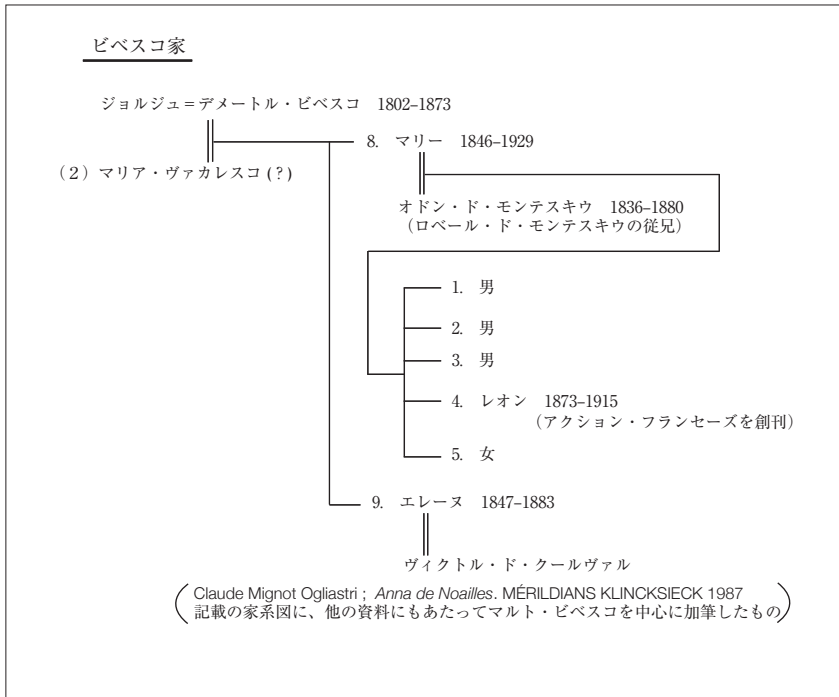
マルトは結婚と同時にルーマニアだけでなくパリでも知名度の高いベビスコ家の1人になった。しかし夫ジョルジュ＝ヴァランタンは自動車耐久走行記録を出し、飛行機操縦を手がけるなど「スポーツマン」として知られていたが、文学や芸術には全く関心が無かった。孤独なマルトに対しエマニュエル、アントワヌは実の兄弟以上の存在として文学・芸術趣味を分かち合い、ブルーストを紹介している。マルトの作中に現れる日本への言及には、ジャポニズムの生まれたパリに住むベビスコ家の人々経由の芸術観の影響も



あるであらう。

【mousmé ; kimono ; bonze】

第一次大戦の後しばらくして、1924年にマルトは初めての本格的な小説『緑の鸚鵡』⁶⁾を発表した。大戦以前に資産を持ち使用人を連れてフランスに移住してきたロシア貴族の家庭が舞台に選ばれている。実際は作者自身の



育った家庭がモデルであるが、ルーマニアと同様に正教の信者が多いロシア人家庭に変えてある。貴族の家庭内で3代にわたり繰り返される近親相姦的な愛の悲劇を描いたバロック的な物語に、家庭に閉じこめられた少女達の痛ましいほどの孤独が重ねられている。家父長制の家庭内でただ一人の息子を病死させた母親は、娘達を受け止めることもなく、ひたすら亡き息子の喪に服している。大勢いる召使たちも、跡継ぎの無い家で働くのは将来が不安であり、それが家中に暗い雰囲気を生んでいる。

ヒロインの少女は白い雌猫を飼っていて、名前は「ムスメ」である。この猫が生んだ3匹の仔猫を、意地の悪い司厨長が便所に投げ込んだ。少女は三日間、助けることも出来ない仔猫たちの鳴き声を聞くことになる。親から情をかけてもらえず、学校という外の世界もなく、家庭内で使用人である家庭教師に教育される上流の少女達の孤独が、見殺しにされた仔猫達に重ねら

れていよう。

この *mousmé* という語はピエール・ロチが『お菊さん』で三十数回用いたことでフランス語に加えられた⁷⁾。ロチはフランス海軍士官が長崎に滞在中に共に暮らす若い娘のお菊さんを繰り返し「*Mousmé*」と呼んだためか、単に若い未婚女性の意味であったのが、フランス語では身持ちの良くない若い女の意味で使われることになった。ブルーストもその意味に用いている。彼について何度も書いるマルトは、ブルーストも念頭において多産な雌猫にこの名をつけたと考えられる。

ロチが日本を訪れたのは1885年、『お菊さん』の出版は1887年である。マルトはその間の1886年に生まれている。王妃エリザベータはカルメン・シルヴァの筆名で著書を刊行し、有名作家ロチと交友関係にあった。マルトは子供時代から王妃に可愛がられていた。結婚後の1905年にマルトは夫と共に自動車でペルシャ旅行をし、1908年に旅行記を出版した。パリの社交界で「ロチのような年配者でなく、貴女のような若い女性のよる旅行記が読みたい」と勧められたからと書いている⁸⁾。利発な少女であったマルトは早くから文筆家ロチの名を知り、意識せざるを得なかったであろう。

『緑の鸚鵡』のヒロインは妹の恋の行方を心配し、ついに女性霊媒師のもとに赴く。彼女は赤いピレネー産ウールの *kimono* を着てトルコ風スリッパ、スペイン風マンティーラという奇妙な身なりである。*kimono* という語は17世紀にヨーロッパに伝えられたとされている。20世紀初めにはすでに部屋着を指しており、日本の着物のゆったりしたカットが共通するくらいであろう。マルトは小説中、登場人物の身なりの描写が比較的少ない作家である。それでもここではフランスの読者を想定して怪しげな占い師にエキゾチックな衣類を寄せ集めて着せおり、*kimono* という語がその中ではフランスから一番遠い国日本を思おこさせよう。

『カトリーヌ＝パリ』はマルトが1927年に発表した小説である。

作者自身の母方の家系やビバスコ家の人々をモデルにし、第一次大戦開

戦前後のヨーロッパを舞台に、パリ育ちの若いルーマニア貴族女性が結婚でポーランド貴族となり国籍と愛のために苦勞する物語である。ヒロインのカトリーヌ＝パリは両親を早く亡くし、祖母と二人の若くない使用人の女性に育てられる。この少女も『緑の鸚鵡』の娘達同様に家の中だけしか知らない。故国を捨てパリを選んだ愛書家の伯父、伯父や亡父の元家庭教師という二人の若くない男性が少女の知的教育を引き受ける。

我侬なポーランド貴族に望まれて結婚したカトリーヌは、すぐに打ち捨てられた妻にされた。金持ちの彼を狙っていた若い女性やその母親たちの嫉妬が渦巻く社交界を無視し、ヒロインは自宅で小さな集まりを持つ。それは夜でも夜会服に着替えない男性ばかりで若くない文筆家や芸術家たち、時にロダンやフランスも加わって知的な会話を楽しむつどいであった。彼等の仕事も名も知らない夫は、彼等に「bonzes」とあだ名をつけて逃げ出す。常連はこの集いを「l'heure de bonzes」と呼びだす。老人の中で質素に育ったカトリーヌには自然なことであった。

bonze という語もロチの『お菊さん』に用いられて、普通の僧侶を指している。19世紀半ばからのヨーロッパのジャポニズムの流れの中で、bonzeは墨絵に画賛を加えるような学識や詩心のある僧という風に美化されて捉えられたこともあった。ゴッホはbonzeになぞらえた自画像を残している⁹⁾。『カトリーヌ＝パリ』のbonzesもこのように創造行為に関わっている男達の意味で使われている。彼等は精神的には若さを保っているがヒロインと恋愛沙汰を起こす気配はなく、社交界の噂好きを落胆させる。夫はその意味でも世俗を離れた人である僧の意味で使ったのであろう。

【Mikado】

『緑の鸚鵡』では2回「日本の天皇」に言及されている。

ヒロインの夫はボロの試合中に落馬し死亡する。すぐに第一次大戦が勃発し、彼女は傷病兵の看護に従事する。休暇が取れて里帰りすると、母は毎朝の新聞で戦況を知り、もし生きていたら亡き息子が成し遂げるであろう数々の偉業を妄想している。家に滞在している英国人の叔母に対する配慮

か、母は息子を英国海軍に入れている。日英同盟が有効な時期である。日本海軍の欧州派遣が話題になると、彼女は息子が「Mikado」を説得して上陸させ、日本刀で「Kaiser」の喉をかき切らせるだろうと言うのだ。日露戦争からまだ10年しか経ていない時代の物語であるが、このロシア人女性は日本に敵意を見せていないどころか味方に引き入れている。狂気に捉えられた女性の妄想が、単に「Mikado」を戦場で有能な軍人としたのであろう。だがヒロインと対立し続けてきた上の妹が駆け落ちする相手はうさんくさいゴルフコーチであり、作者は裕福な貴族の娘には釣り合いの取れないこの男をスウェーデン人にしてある。スウェーデンはロシアと度々戦った歴史があり、ロシアからは仮想敵国であった。ロシア貴族からは不愉快な国を良くない結婚相手の国籍にしている。しかし作者マルトの国であるルーマニアはトルコから解放されても19世紀中ロシアの圧力を感じていた。ロシアを破った極東の小国に寄せる作者の好意が現れたのかもしれない。

この母親の心は亡き息子だけが占めており、五人の娘たちの場所はない。姉達が結婚で家を去った後、末娘のマリイは老親、老いた召使達、老犬の中で20年間住み込んでいる仏人家庭教師を相手に暮らしている。里帰りしたヒロインは妹の部屋で鏡の前の絨毯が磨り減っているのに気づき、自分と同じような妹の習慣を見抜く。自己の美貌に陶醉してではなく、姉妹ともども百面相をして遊ぶのだと作者は説明を入れる。二人とも孤独のなかで鏡に映る自分を眺め、自分しか頼りにならず、自分を知るほかないとの考えに達するのだ。ここでヒロインは「ある古い旅行記で、おそらく架空のものであろうけれど、まことに感動的である日本の古来の習慣の記述」を読んだことを思い出した。若い天皇が即位する時、神官や高官達に導かれて七つの神殿を訪れ、宝物、先帝達の画像、聖典、神獣や神々の彫像にまみえる。最後の神殿にはただ一人で入らねばならない。そこにあるのは小さな丸い鏡のみ。それは「一切は無、己のみを頼れ」を意味する。天皇家に伝わる三種の神器の一つが鏡であることは知られている。だがこの即位の儀式の描写は、作者が慎重にヒロインに言わせるように、おそらく架空の記述であろう。ロチは訪

れた京都や日光の寺社で目にした狛犬、牛、想像上の怪獣や奇怪な神々の描写を『秋の日本』に沢山盛り込んでいる。これと開国直後の日本に訪れた西欧の外交官達が著した旅行記等からヒントを得て創作したのであろう。マルトは身内に何人も外交官がいる環境で暮らしていたのだ。

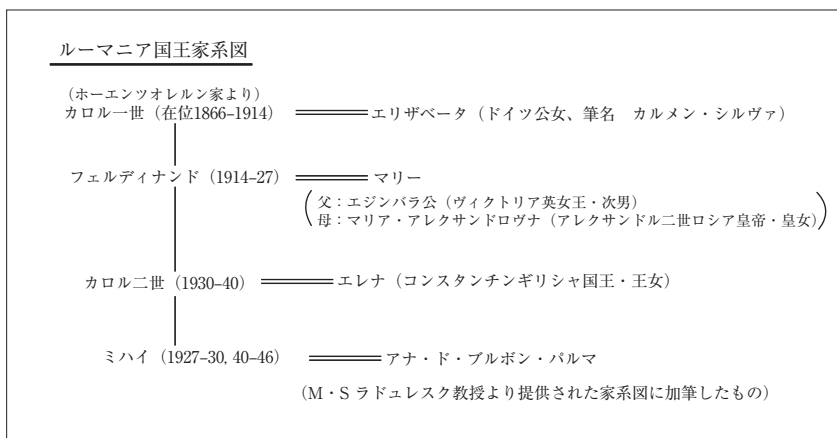
移住して外国に住むロシア貴族の娘と日本の若き天皇、即ち「Mikado」の孤独を鏡で結びつけ、後に自死を選ぶ娘の誇りと「Mikado」の高貴さを連想させている。貴族の誇りに生きたマルト・ベビスコにとり、高貴なるものの孤独は主要なテーマの一つであった。

この物語の後半でヒロインの父は革命直後のロシアから脱出して死亡し、父の遺志に従って彼女は一人の青年を幽閉されているロシア皇帝救出に旅立たせる。マルセイユを出航した青年は中国から満洲を経て、トボリスクに救助に向かう予定である。日露戦争の原因の1つは満洲における権益であった。この小説が出版された1924年当時、すでに中国のこの地域支配に対する日本の意欲が欧州でも知られていたようだ。生まれた時から外交旅券を持っていたマルト・ベビスコは、ここにも日本の影を見ていたのかもしれない¹⁰⁾。

【東京の郵便配達夫】

1936年に『平等』と題する小説が出版された。旧い貴族の家系に生まれた女性が由緒ある貴族に嫁いだが大戦で寡婦となり、お手伝いの息子である政治家との間に生まれる恋の物語である。フランス共和国のモットーの一つを題名に選びながら、出自のために共和主義者の庶民から差別を受ける女性の不平等が書かれている。兄であるスコットランドの公爵、陸軍大臣になった恋人と彼女の三人が会食し、戦争の廃絶が話題になる。ジュネーヴの国際連盟での話し合いは難航している。当時進歩目覚ましい航空界に詳しい公爵は、制空権をもつ国際警察のような組織を作り戦争を避けるアイデアを述べる。彼はその例として国際郵便制度を持ち出した。

……私は1ペニー切手一枚に半ペニー三枚を手紙に貼り、東京に住む



友人のアドレスを書く。これを信頼し全く当然のこととして行い、貴方も 1 フラン 50 の切手で同様のことをなさるでしょう。貴方も私も「自分の手紙は日本人の配達夫が届けるはずだ（私は彼になんら強制権は無いのだ）、そしてもし雨が降ったら、彼は家から出て油紙を貼った傘を開き、私の手紙を配達にゆくだろう。」と思うのですね。文明というのは信頼の問題です。もしも私が「日本人の配達夫が私の手紙を届けると誰が保障するのか？」と考え始めたら、すべてがお仕舞いですな。国際的な小切手の時代が来ると思いませんか？ (*L'Égalité* ; la petite Illustration, No711 ROMAN No333 p50, 16 fév.1935)

日本人の配達夫は *un petit facteur japonais* となっている。ロチは日本人に「petit」という形容詞を多用した。公爵の話し相手の陸軍大臣が初めて政界に乗り出し南仏の市長になったのが 1920 年とされている以上、この対話の時期は日本が昭和にかかるころのことであろう。その時代になっても配達夫が番傘で配達するとは考えにくい。『お菊さん』の中で人々が長崎の雨を番傘で避ける描写がある。公爵は 30 年以上昔に評判になったロチの小説で描かれた日本のイメージを持ち続けているようだ。

クローデルは日本を「新興文明国」と呼んだ¹¹⁾。鎖国を解いて西欧の政治制度や学問、産業等あらゆる分野で追いつこうとしている日本は明らかに新興国である。しかし一定水準の文化が評価され、先進国にジャポニズムが生まれたのであるから、その意味で文明国である。人々の間で信頼関係も保たれている国だと彼は見ている。

1920年、ルーマニア皇太子カロル二世がインドと上海を経て来日した。有力な軍人や外交官が随行し、滞在中に日本側の接待が非常に段取り良く行われ、宿泊・移動ともなれば不都合が無かったことを報告書に残している¹²⁾。ルーマニアの上流社会の住人マルト・ベビスコはその情報にも接して、東京のつつましく真面目な郵便配達夫を登場させたとも考えられる。

【マルトと日本の間に——日本を伝えた人々】

マルトには来日経験はなく、おそらく日本人と知り合う機会もなかったと想像される。

ジャポニズムはパリを中心に生まれたが、パリよりはルーマニアに近いウィーンの1858年万博にも日本の工芸品が出品されており、クリムトの装飾美術に日本美術の影響が伺われる。ドイツから迎えられルーマニア王となったカロー一世は1976年から8年かけ夏の離宮ペレシュ城を造られせた。ここにはクリムトの装飾画がある他、夥しい木彫装飾がほどこされ、絵画、絨毯、古い武器や甲冑、陶器等のコレクションがあり、中には伊万里も含まれている。マルトが嫁いだベビスコ家の所有地は、ペレシュ城の所在地シナイアとごく近い。王宮に伺候した彼女が日本渡来のコレクションの傍を通っていたのかもしれない。

『緑の鸚鵡』の中で、貴族の子供は外国に親戚があることが多く、それぞれの国民性と個性を読んで応対することが書かれている。『カトリーヌ＝パリ』では、ヒロインの義母であるポーランドの伯爵夫人が家名存続を第一として、いざという時に頼れるよう周囲の国々に一人ずつ娘達を嫁がせている。ヒロインの祖母であるルーマニアの大公妃の一族中にも、潤沢な持参金付きで西欧の貴族に嫁いだ女性は何人もある。二つの大戦が社会的影響力の面で



写真1 シナイア近くにあるクラ・ボサダと呼ばれていたビベスコ家。お菓子の城のような屋敷を第一次大戦中に焼失した後に建てたもの。＜モゴショアイア＞の修復が完成するまでマルト一家はここに暮らしていた。(撮影 2001 年 9 月松浦まち子氏)



写真2 上記のビベスコ家入り口に掲げられているマルトのレリーフ。

はこのような貴族社会の網目を断ち切ってしまうが、血縁は存在し続ける。

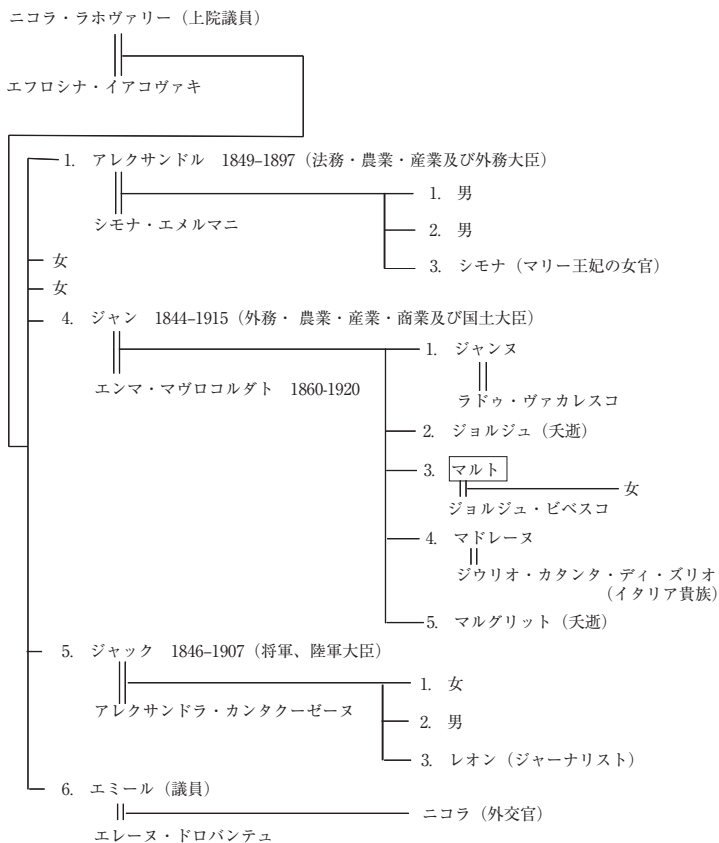
ロベール・ド・モンテスキウとマルトの間にも幾組みかの姻戚関係があり、親戚同士である¹²⁾。彼は小説中で実名をあげマルト・ベビスコを賞賛しており、彼女も彼とは一度も不和になったことはないと言っている¹⁴⁾。

先祖伝来の城を維持は貴族の誇りの拠り所であり、高い趣味性と多大の財力が必要になる。マルトは夫から贈られた石造りの館<モゴショアイア>を17年もかけて修復した¹⁵⁾。当時の写真によると、庭園はロワール川沿いの城の庭に見られるように灌木を刈り込んで図形を作ったフランス式庭園である。2001年に著者がここを訪れたとき、この館の内部は美しく修復されていたが、庭園にまでは手がまわらない様子であった。マルトがこの館に集中したため放置されたという<ラ・ボサダ>と呼ばれたベビスコ邸はなだらかな丘の途中にあって、傾斜地の木々の配置は日本の山寺の景観のようであった。マルトがルーマニアを去って半世紀、彼女が植えたというレパノン杉が大きくなっていた。花が大好きなマルトと盆栽に関心を見せたモンテスキウ。日本趣味で知られるモンテスキウから、彼女も日本についてなにかの知識を得たのではないであろうか¹⁶⁾。

マルトの親戚には外交官が多い。第一次大戦前の外交官は王や皇帝など君主の代理人を務め、外国に広がる姻戚のネットワークを利用できる貴族階級出身者が少なくない。彼女の父ジャン・ラホヴァリーは公使としてパリに赴任した後に外務大臣を務めた。父の兄アレクサンドル・ラホヴァリーも外務大臣を経験している。父の弟エミルの息子ニコラ・ラホヴァリーはパリの公使となり、1916年にルーマニアが連合国側に参戦の報を得るとパリ滞在中の従姉マルトに教えている。

同じ時、元同盟国のオーストリア＝ハンガリー帝国に対し連合国側参戦を伝えたのはウイーン公使であるマルトの母の兄エドガー・マヴロコルダートであった。彼は大战後の1921年6月にルーマニア特命全権公使として東京に赴任するが、わずか八ヶ月の滞在で1922年2月に帰国している。その年の4月には経済的事情を理由にルーマニア公使館は閉鎖され、再開は昭和に

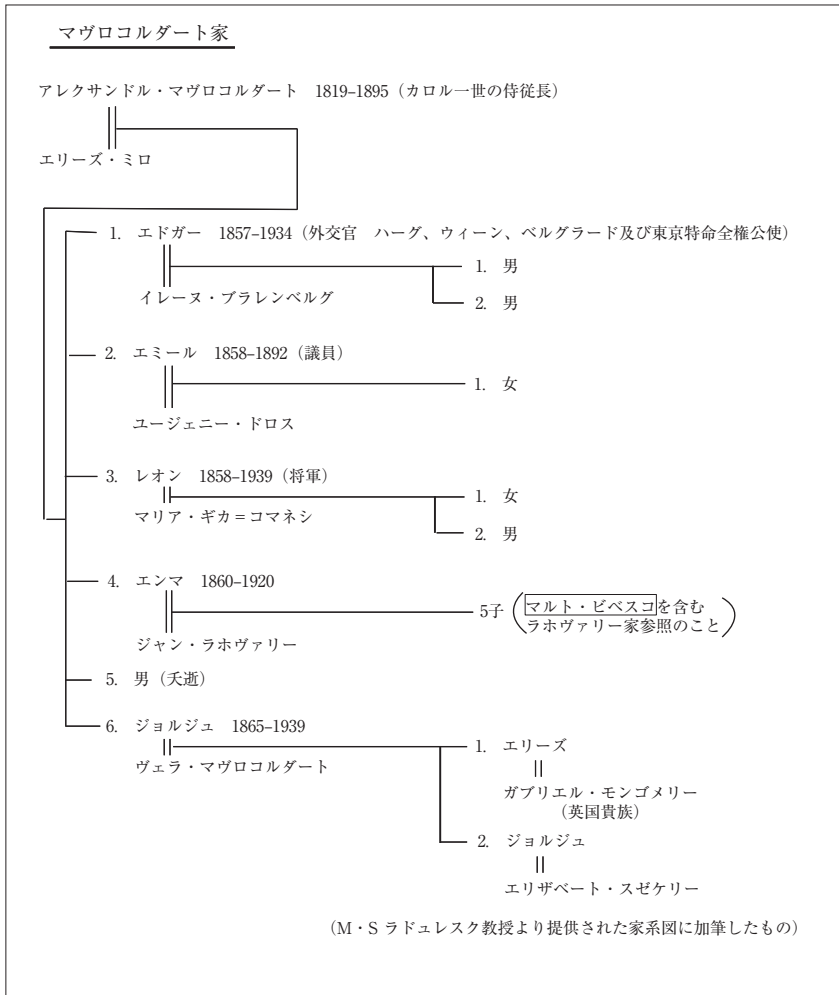
ラホヴァリー家



（M・S ラデュレスク教授より提供された家系図に加筆したもの）

入ってからであった。

ポール・クローデルが駐日フランス大使として来日したのは1921年11月である。僅か3ヶ月間であるがマルトの叔父とクローデルは東京に同時に滞在していたことになる。大戦を同盟国として戦った国の外交官同士である



が、二人が日本で会ったかどうかは不明である。クローデルは大国フランスの詩人大使として華々しく来日した。それに引き換え、マヴロコルダートは明らかに公使館を閉鎖するための来日であった。ルーマニア公使が積極的に詩人大使のもとに出ては行かなかったと考える方が順当であろう。また、マルトが主要な作品である『イズヴォール、柳の里』を発表したのが1923年、

その後、1924年『緑の鸚鵡』、1927年『カトリーヌ＝パリ』と続く。マヴロコルダート公使が1922年に日本を去った後に姪の文名が高まることになる。マルトの名前がクローデルの日記に初めて現れるのは1925年の休暇で一時帰国した時からであり、彼が日本について講演を行った日に *Princesse Bibesco* の名前が書き込まれた。注には、2人の交際はここから始まったらしいこと、マルトは後にクローデルにとり親友になったとの記述がある¹⁷⁾。日記全体でマルトの名前は20回も登場する。

マルトが1911年に正教からカトリックに改宗した時に司式したミュニエ師¹⁸⁾の日記にクローデルがしばしば登場する。休暇中の駐日大使と会食した日の日記に、師は「ピエール・ロチの日本に対する見方は、『お菊さん』よりも『秋の日本』の方が正しい。クローデルはロチの描いた移り気な小娘の側面を好まない。」と記した¹⁹⁾。マルトはパリのビベスコ邸にクローデルを何度か招いている。それ以外に彼らが他家に招かれて度々同席、クローデルの家族や友人にマルトも加わってのドライブや散策等を彼の日記から知ることが出来る。これら社交的な集まりでクローデルが5年余り滞在した日本について語る機会は多かったはずであり、マルトそれを聞くことの出来る場所にいたのだ。

マルトの夫の従兄アントワース・ビベスコもパリで育って外交官になり長らく英国に滞在、英国首相を経験したアスキースの娘と結婚している。アントワースの兄エマニュエルはルーマニアの国会議員であった。彼は1914年の初めに日本から帰り、顔面麻痺に襲われ、1917年に自死を遂げた²⁰⁾。エマニュエルがどのような目的で来日したのかは分らない。19世紀、ルーマニアの全農地の3分の2は大土地所有者のものであった。彼らは不在地主で農地経営を管理人にゆだね、ブカレストやパリに邸宅を構えて生活していた。1921年に王フェルディナンド一世の下に農地改革が行われ、大土地所有は減った。しかし一握りの富裕層と多くの貧しい農民というこの国の構図は長く続く。マルトの両親は勿論ビベスコ家も富の蓄積がある層に属していた。エマニュエルが国会議員となっても長くパリやロンドンで暮らしている

のにはこのような背景がある。

外交官アントワヌも日本に数回行ったと語っているという。おそらく両大戦の間のことであろうが、これも目的・時期とも不明である²¹⁾。

航空機が一般化するまでは以前の 20 世紀前半には欧州から日本への旅は西欧から乗船するにせよ、ルーマニアからシベリア鉄道経由でウラジオストックから船にするにせよ正味 1 ヶ月以上必要とした。例えばクロードルは日本に赴任するため 1921 年 9 月 1 日にパリを発ちマルセイユから出航、途中仏領インドシナに 1 月半滞在し、香港、上海に立ち寄り、11 月 19 日に横浜に入港している。長い旅行時間をかけて直接日本を訪れた人物が少ない時代にマルトは叔父、2 人の従兄、そしてクロードルから日本の話を聞ける立場にあった。

【Orient から Extrême Orient へ】

マルトは結婚後に夏はルーマニアのベビスコ家の屋敷、後には彼女が修復したブカレスト郊外の館<モゴショアイア>に暮らし、冬はパリで過ごす習慣であった。パリに行けば外国人、ルーマニア貴族として「東方 Orient 姫君」と言われ、ときにはペルシャ旅行の本で売り出した物語作家のため「シヘラザード」に擬えられている。西欧では東欧から中東、近東までも Orient で一括りされるのである。

周辺国から度重なる侵入と支配を受ける苦難の歴史に耐えてきたルーマニアの人々は、近くの時代よりも遙か昔にさかのぼって、東ローマ帝国 Empire d'Orient に思いをはせる方を好むのだ。ルーマニアを植民地支配したトルコも、かつては東ローマ帝国、ビザンチンに支配された歴史がある。マルトもビザンチン帝国まで祖先をたどることが出来る。1932 年にコンスタンチンブルを訪れた彼女は貴族の誇りを支えとして壮大な一族の歴史を書く構想を持ち始めた。しかし世界情勢は緊迫し、第二次大戦になる。

1941 年に由緒ある館《モゴショアイア》で夫が亡くなった。1944 年 8 月末にソヴィエト軍が侵入し、ルーマニアを支配下におさめる。翌年の夏、フ

ランス大使館からの連絡でマルトは唯一人の民間人として英国空軍機に乗ることが出来てフランスにたどり着いた。

裕福な東欧の貴族ビベスコ大公妃は亡命者となり 60 歳を迎えた。フランス国籍を取得して、生活のために書くことになる。二度しか会ったことのないブルーストのこと、戦前の社交界で知っていた誰彼、歴史上の人物を小説にしたものなどを出版した。ついに祖先の物語に着手したが、第一部は「神話と歴史が混在した混沌たるもの」(Diesbach)であり、不評で出版社との関係が難しくなる。第二部は、作者の死後に出版された²²⁾。これは彼女に一番多くパリのことを語り聞かせたであろう人物、姑のヴァランチヌの人生を描いたものである。当時のフランスで離婚は許されないため、国外を転々とした義母の波乱に満ちた生涯を語るにあたり、書き手マルト自身のことから始める。1945 年フランス大使館からの 1 本の電話で出国の意思を聞かれ、英国のヴィザを取り、1 月後にソヴィエトのヴィザを入手しルーマニアを脱出したのは「広島、長崎に原子爆弾が投下された夏」のことであったと。『平等』の中でヒロインの兄であるスコットランドの公爵は絶滅に瀕している品種のカーネーションを栽培している。この花の害虫である小さな赤い蜘蛛を駆除するには薫蒸を行う。すると温室も鉢も花も残るが、蜘蛛だけが死んでしまう。ロンドンもパリも残ったとして、そこには生きた人間が一人もない世界を語りだす。『平等』の出版から 10 年目の 1945 年、マルトの予測したようなことが日本で現実となってしまった。おそらく日露戦争の勝利以来マルトの記憶にあったであろう極東 Extrême Orient の小国は、こうして惨憺たる結果になった。

昔から次々現れる周囲の強国に脅かされ、歴史はテロリズムであるとも言えるルーマニア人たち。彼女にとって、国境が海である日本は長らく侵略されることもなく、独自の文化を育ててきた国ではなかったろうか？ パリ経由のジャポニズムの知識と、政治感覚が鋭い彼女が理解している日本の大陸への野心。その結果に痛ましさを感じたことであろう。

ともあれヨーロッパで日本の情報が少なかった時代に、この 19 世紀生まれの女性作家がみせた日本への知的好奇心には興味深いものがある。

註

- 1) ルーマニア語ではマルタ・ビベスク Martha Bibescu である。最近は本国での呼び方が採用されだしているが、彼女の全著書が初めはフランスで *Princesse Bibesco* の名で出版されたので、本稿も出版時のフランス風の呼び方に従う。彼女の作品については拙稿『マルト・ビベスコと彼女の小説 (I—V)』, 慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学 第 28 号 (1999) —第 32 号 (2001) に掲載。
- 2) ジョルジュ・ムンテアン氏 (1932–2004) はルーマニアの文芸評論家・民族学者で、広い分野で活躍してこられた。2003 年 6 月に夫人のアデラ・ポベスクさんの詩集『私たちの間に——時間』(住谷春也訳・未知谷) 翻訳出版に際し、二人そろって来日された。その時、筆者にマルト・ビベスコについてルーマニアの雑誌に掲載するものを書くように勧められた。残念なことに、氏は帰国されて一年後に病没された。氏のお勧めで纏めたものに、その後に分かったことを加筆したのが本稿である。
- 3) Ghislain de Diesbach; *La Princesse Bibesco* (Paris, Perrin 1986)
Princesse Bibesco ; Catherine-Paris (Grasset 1927)
- 4) ビベスコ家の家系図参照。名前は原則としてフランス語表記の発音。
- 5) カルポー Jean-Batiste Carpeaux (1827–1975) バロック、ロココ様式を残す伝統的彫刻に対して自然な彫刻を主張、光と影の効果や動きを表現した。(Le Petit Robert 2, 2000)
- 6) *Princesse Bibesco; Le Perroquet vert* (Grasset 1924)
- 7) 末木友和; 『アルベルチヌとお菊さん』慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学 第 6 号 (1988)
Pierre Loti; *Madame Chrysantème* (Calmann Lévy 1887)
- 8) *Princesse Bibesco ; Au bal avec Marcel Proust*, 1928 (Gallimard 1958)
p.37
- 9) 馬淵明子『ジャポニズム 幻の日本』(ブリュッケ 1997) p.155
- 10) 駐日フランス大使 P. クローデルは、着任早々 1921 年 11 月 28 日付けの外交書簡で資源の乏しい日本が中国に進出せざるを得ない事情を本国に知らせている。P. クローデル、奈良道子訳; 『孤独な帝国 日本の一九二〇年代——ポール・クローデル外交書簡 1921–27』(草思社 1999)
- 11) *ibid* p.24
- 12) ブカレスト大学史学部教授ミハイ・ソリン・ラデュレスク氏 (Mihai Sorin Radulescu ルーマニア近代史専門) のご助力により、皇太子の随員による記録の仏訳を参照した。Général Constantin Gavanescu; *Le tour du monde en sept mois et une journée. Le voyage fait avec S.A.R. le*

Prince Carol, l'héritier du trône; 1920 février-1920 septembre 21, (Timișoara 1923)

- 13) 両者の親戚関係についてはビベスコ家の家系図参照
- 14) Robert de Montesquiou: *La Petite Mademoiselle* (Albin Michel 1911) p.175
Princesse Bibesco ; *Au bal avec Marcel Proust*, p.73 及び *Le confesseur et les poètes* (Grasset 1970) p.136 に同じことを書いている。
- 15) 〈モゴショアイア〉は G-D・ビベスコの最初の妻であり、マルトの祖父の養女ゾエの祖先ブランコヴァン公が建てた館である。マルトの夫ジョルジュの伯父ニコラからその娘が継いでいたものをジョルジュが買い取ってマルトに贈った。
- 16) 鈴木順二 『マルセル・ブルーストの訪ねた日本庭園』 慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学 第26号 (1998)、28号 (1999)
- 17) Claudel; *Journal I* (Gallimard 1968) : *Journal II* (Gallimard 1969)
- 18) L'abbé Mugnier (Arthur Mugnier, 1853-1944) 文学に造詣が深く、機知にとんだ会話や書簡でパリの貴族社会や文学者たちとの交際で有名。「公爵夫人たちの聴罪司祭」と言われ、従姉妹同士であるが、マルトと激しいライバル意識を持ち合った詩人アンナ・ド・ノアイユの最後の日々に彼は立ち会っている。彼とマルトは「伯父様」「姪」と呼び合う親しさであった。G. de Diesbach ; *L'abbé Mugnier Le confesseur du Tout-Paris* (Perrin 2003)
- 19) *Journal de l'abbé Mugnier* — 1879-1939 — (Mercure de France 1985) p.455 15 avril 1925 : ミュニエ師はクローデルが日本赴任以前にも高齢のロチの芳しくない噂を何回か書きとめている。ロチの名声の名残であろう。
- 20) G. de Diesbach ; *La Princesse Bibesco* (Paris, Perrin 1986) p. 265 及び同作者の *Proust* (Paris, Perrin 1991) p. 623。
- 21) 第2次大戦直後に出版された本の中で、アントワヌ・ビベスコはインタビューで日本に何回か行つたと答えている。(cf. M.S. ラデュレスク氏) (Dr. Ion Biberi ; *Lumea de mâine* (Le Monde de demain, ?)
- 22) Princesse Bibesco ; *Où tombe la foudre* (Grasset 1976)

【参考文献】 上記以外のもの

Junji Suzuki ; *Le Japonisme dans la vie et l'œuvre de Marcel Proust* (Keio university Press 2003)

Index Générale de la Correspondance de Marcel Proust (京都大学出版会 1998)

Claude Mignot-Ogliastri; *Anna de Noailles* (MÉRIDIANS KLINCKSIECK 1987)
フィリップ・ミシェル＝チリエ著 穂苅瑞穂監修・湯沢・中野・横山訳；
事典ブルースト博物館（筑摩書房 2002）

Sincères remerciements,

A Dr.Mihai Sorin Radulescu de L'Université de Bucarest, et Dr.Mihaera Serbulea
pour les renseignements qu'ils m'ont fournis aimablement. Mariko Sano